



秩父別町立秩父別中学校 学校だより

平成29年 3月13日発行 第29号

秩父別町2条2丁目 Tel 0164-33-2650

発行責任者：校長 廣瀬 一仁

編集：教頭 佐々 謙彰

至誠力行の志を嗣ぐ人に

十二名の卒業生が、明日、本校を旅立っていきます。

本日、担任の大作教諭の許しを得て、卒業生に対して講話をする時間をつくってもらいました。

わが町秩父別町は屯田兵による開拓をもって拓かれたとされておりますが、当時内地からやってこられ、未開の原生林を切り開き、住居をつくり作物を植え、冬の厳しい寒さに耐え抜いてこられた先人たちの苦労は、我々の想像できないくらいの過酷なものであったろうと拝察します。今や我々はそうした多くの方々が基盤を作り、発展させてきてくださった恩恵を得て、何不自由ない生活を送ることができています。このことは決して忘れてはならないことです。

当時の人達を強く突き動かしていたのは、忍耐や不撓不屈、協調や人間愛などという今も変わらぬ精神によるものでありましょう。

話は戻りますが、卒業生に対して私は南極探検家であるシャクルトンという人物が「エンデュアランス号」という船で行った苦難の探検の話をしました。南極探検といえば、アムンセンやスコットの話は誰もが聞いたことがあると思いますが、このシャクルトンの話は殆ど人口に膾炙していないと思います。

興味のある方はこのあと紹介する書籍やインターネットで調べて頂きたいのですが、ごく簡単に紹介しますと、南極点到達の名誉を先にアムンセンに越されたシャクルトンは、南極大陸初横断という新たな目的で1914年に28名の探検隊を率い南極に向かいますが、厳しく過酷な自然環境に阻まれ、結局南極海でエンデュアランス号を失い、氷の上で漂流生活したり、助けを呼ぶために小さなボートで1300kmに及び無謀な航海に出たり、装備も無しで3000m級の冬山越えをしたり（これらの漂流生活はほぼ2年間に及び）、とても信じられない困難を乗り越え、さらに驚くことに隊員には一人の犠牲者も出さず全員で文明社会に生還できたというものです。

卒業生には、この先長い人生で喜びも悲しみも、そして困難もあると思いますが、この話を思い出し、乗り越えて行ってほしいという思いです。

さて、この話で特筆したいのは、秩父別を拓き発展させた先人と同様、その過酷な状況に力強く挑み努力する姿であります。もう一つお教えしたいことがあります。この探検の途中で氷に押しつぶされ失われた探検船、「エンデュアランス号」であります。これはシャクルトン家に古くから「家訓」として伝わってきたものから名付けていると

ということです。その家訓「エンデュアランス（Endurance）」とは、日本語に訳すと、「不屈の忍耐」となるそうです。まさにシャクルトンはこの家訓に基づいて行動し、探検の成功以上の成果をもたらしたといえます。

さて、シャクルトンの家訓と同じく、本校にも「至誠力行」という立派な校訓があります。これまで本校を卒業した五千名以上の先輩たちと同じく、今年の一二名の卒業生もその校訓に基づき、誠実に力の限り努力し何事も最後まであきらめることなくやり遂げる人として、力強く旅立ってほしいと思います。

卒業生の保護者の皆様、お子様の卒業、たいへんおめでとうございます。

【この話に興味のある在校生の皆さんへ】

シャクルトンのエンデュアランス号による南極横断探検に関して、日本語で読むことができる書籍を並べてみました。このうち、左上「エンデュアランス号大漂流」、右上「そして、奇跡は起こった！」の二冊は中学生でも読みやすい内容となっています。特に、「エンデュアランス号大漂流」は、本校の図書室に新刊として配架されていますので、是非読んでください。



壁にぶち当たった時に読んでみると、自分の置かれている状況なんて全然大したことないと勇気が湧いてくること請け合いです。

『つかめ15の春 公立高校入試』

3月7、8日に公立高校入学試験が行われました。今年は、3年生12名全員が7日の筆記試験に10名が8日の面接試験に臨みました。

試験では、社会で6年連続北方領土に関する問題が出題されたり、面接では、概ね練習通りのことを聞かれたようですが、「合格発表の日時」の質問は、初めてだったような気がします。全員が「15の春」をつかむことができると切に願っています。